

〔當評論『アメリカの自然と生活』も、向後評論『醒めて踊れ』の以下文を援用し、その文中「近代化」を「文明化」と読み直すことで、理解出来る。そして肝腎なのはこの文章こそが、日本の現状(米國化・文明化D1適應異常即ち右圖)からの脱出方法なのであると言ふ事〕(PP圖『ソフトウェア』参照)

\*「近代化(⇒文明化:D1)の必要條件は技術や社會制度など、所謂『ハードウェア』のメカナイゼーション(機械化F)、システムライゼーション(組織化F)、コンフォーマライゼーション(劃一化F)、ラショナライゼーション(合理化F)等々の所謂近代化に對處する精神の政治學の確立(Eの至大化)、即ち所謂『ソフトウェア』の適應能力(Eの至大化)にある。(中略)それに對應する方法は言葉や概念に囚れず、逆にこれを利用すること、即ち言葉の用法(Eの至大化=言葉の自己所有化)にすべてが懸つてゐる。自分と言葉との距離が測定(Eの至大化)出来ぬ人間は近代人ではない。いや人間ではない」(全七P393)。

P466下:「ヨーロッパ(△枠)の十八世紀は理性、合理性、合目的性、進歩などの概念が信じられてゐた時代」⇒「十九世紀にいたつて一頓挫をきたした」⇒「科學(F)だの進歩(F)だのといったところで、大したことはない」⇒「物質文明(D1)が人間の幸福に寄與しうるものにはおのづから限界のあることに氣づいた」⇒「この絶望の裏には科學(F)の行き詰まりと同時に、資本主義(F)の行き詰まり(Eの至小化)があつた」。

歴史的  
變遷

P467上:「アメリカ(△枠)はそれ(科學の行き詰まり・資本主義の行き詰まり)に觸れずにすませることができた」⇒「なぜなら、アメリカ人の前には、科學技術(F)を適用し資本主義(F)を延長せしめうる無限の空間(捨てられる自然)があつた」。

歴史的  
變遷

\* P467上:「自然科學(F)と物質文明(D1)にたいする私たち(△枠)の期待は底なし(距離感喪失・沈湎)である」⇒「突如としてアメリカ文明(D1)が流れ込んできたのだ。機械(F)が次々に送り込まれてきたのだ。十八世紀も十九世紀もあつたものではない。物質文明(D1)は私たちにとつて、たんに同一線を辿る(歴史の繼續性PP圖参照)先進國の贈物ではなく、まったく別世界の異質のものだつたのである」⇒「その結果、どういふことが起つたか」⇒「日本人の眼に、機械文明(D1)はあらゆる富(F)を生みだす鍊金術(絶對視=Eの缺如)として映じたのである〔即ち「鍊金術」視とは、機械化(F)に對する距離感喪失(Eの至小化或いは缺如)=近代(c')に對する距離感喪失(近代化&文明D1化適應異常・D1の至小化)を是は意味する〕」。

先進國(近代c')

近代化(D1文明)・・・  
「物質文明の限界(D1の至小化)」

F・・・進歩(F)  
科學技術(F機械化等)・  
資本主義。

\* Eの至小化・・・  
「科學(F)だの進歩(F)だのといったところで、大したことない」⇒「この絶望の裏には科學(F)の行き詰まり(Eの至小化)と同時に、資本主義(F)の行き詰まり(Eの至小化)があつた」。

文明(D1近代化)

D1・E信奉  
の差異

F・・・科學  
技術(機械  
化等)・資  
本主義。

先進國(近代:C)

\* Eの至大化・・・  
「アメリカ人の前には、科學技術を適用(Eの至大化)し資本主義を延長せしめうる(Eの至大化)無限の空間(捨てられる自然)があつた」。

F:「日本人の眼に、機械文明(D1)はあらゆる富(F)を生みだす鍊金術(絶對視・Eの缺如・呑み込まれる)として映じたのである〔即ち「鍊金術」視とは、機械化(富=F:○印)に對する距離感喪失(Eの至小化或いは缺如)=近代(c')に對する距離感喪失(文明D1化適應異常)〕」

D1・E信奉  
の差異

近代化&  
文明化  
D1適應  
異常(D1の至小化)。

先進國(近代c')